

世界がだんだん悪くなる～♪

NHK 朝ドラ「バケバケ」主題歌の冒頭の句は、世界の人々の実感だろう。

地政学という学問は、世界の状況を主に政治的・軍事的なパワーの観点から説明する学問のようだ。

イラン戦争について、アメリカとイスラエル対イランの政治的・軍事的・地理的な力関係を、周辺諸国や中国ロシアも視座に含めて説明する。こうして世界にパワーのせめぎあいの状況は掴める。しかし、その目的は何のだろう。

「こんなことをしてはいけない。事態はより深刻化して第三次世界大戦になるぞ。」と警告するためだろうか？ それとも、「アメリカ・イスラエルとイランのいずれが勝つだろう」と勝敗予測をするためだろうか？ それとも、「各国はより軍事力を拡大して戦争の危険に備えるべきだ」というためだろうか？

地球温暖化に関する研究は、一種地政学的な面を持つだろう。各国の CO2 排出の（勢力）関係を研究する面があるからだ。こちらの目的は人類に対する警告に他ならないのだが……。

10 年ほど前に「地政学」について書いた新書を買って、電車の中で読んだが、「地政学」とは何であるのかよくわからなかった。その地政学者が地政学を始めた動機が半分くらい書かれていただけだった。

最近では、政治家も「地政学」という言葉を頻繁に使うような気がする。国会の質疑などを見ていると、この言葉を幾度も聞いた。「で、だからどうなの？」という点は印象に残っていないが……。

ところで、人間は、問題を解決するために、どのような方法を使うのかを考える。

しかし、その問題解決の目的については真剣に考えない。

「敵をせん滅するにはどうしたらよいか」と考える。

「敵をせん滅する」という目的はどういう意味を持つのかを考えない。

その目的は自明の前提として設置される。

しかし、自明である根拠には客観性がない。

したがって、主観的で、思い付き的で、気紛れで、適当で、もしかしたら我が欲するところのエゴイズムの域を出ないのかもしれない。クマの一種であるおいぼれ「トラ…」にはこの傾向が顕著にみられる。

「敵」という言葉は、自分は正義であり、相手は悪であるという前提がある。

しかし、現実の「敵」はそんな単純な存在だろうか。

「悪いところもあればよいところもある」

それは敵対する両者に共通するものだろう。

にもかかわらず、相手を敵として悪と決めつけるのは、つまり、「敵」という言葉を使う時、人間は相手を見なくなっているということの意味している。

A国は敵国だ。したがって、A国人は敵だ。相手はA国人だ。したがって、相手は敵だ。

このような概念操作で、生身の相手を敵として扱う。

NHKの朝ドラで「observe」という言葉が出てきたが、相手を「observe」しなくなっている。

指導者が、相手を「敵」と叫び、人々がそれを支持する時、人々は指導者の命令を受けたロボットのようにになっている。思考は停止している。

ここでは、人間が脳皮質を使って生み出してきた文化は無効化する。国際法や人道といった文化が。

最初に行動するものに付き従う、動物の「群れ」になっている。

私はキリスト教についてはまったく無知な素人だ。しかし、「あなたの敵を愛しなさい」というキリストの言葉だけを取り上げてみると、もっとも深い洞察に満ちた言葉ではないかと思う。この

言葉は、深く洞察された人間の本性に対するアンチテーゼではないのか。核兵器が本格的に使われるかもしれない危急存亡の秋である今、この言葉は人類に突き付けられている。

もちろん、私が敵を愛することができる人間であるなどという毛根も浮くような偽善的錯誤を披露するつもりは毛頭ないのだが……。

ちなみに、「キリスト教については」と助詞「は」を使い、「キリスト教」を特に取り上げて提示したが、私は、仏教も、イスラム教もよくは知らない。母の葬式でお経を聞いていて爆睡したくらいだから。妹に「あなた、喪主でしょ！」と叱られた。